

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月24日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520675

研究課題名（和文） 日本近世の労働社会に関する総合的研究

研究課題名（英文） Comprehensive Research on Labor Relations in Early Modern Japan

研究代表者

森下 徹 (MORISHITA TOORU)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：90263748

研究成果の概要（和文）：日本近世における労働者社会について、大坂や萩など地方城下町を素材にして検討した。とりあげたのは、港湾で荷役に従事する仲仕、藩に雇用された奉公人、あるいは木綿の加工過程に従事するものなどである。そしてかれらの労働に吸着しようとする業者が成長する一方で、そうした雇用労働のなかには、独自の共同性を維持し、さらには強固な組織を発達させるものもあったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The research on Labor Relations in Early Modern Japan is based on maintained and in some cases develop into a rigid organizational structure. The research on Labor Relations in Early Modern Japan is based on materials of the District Castle Town Ōsaka and Hagi. The subject of my research are stevedores loading and unloading ships in ports, apprentices employed by the domain and workers taking part in cotton processing. My research reveals, that with the growing prosperity of traders associated with these workers, the original labor community relations are maintained and in some cases develop into a rigid organizational structure.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：労働社会、奉公人、仲仕、綿打

1. 研究開始当初の背景

| 今日、労働の問題があらためて社会的な関

心を集めているなか、日本における労働社会の歴史的性格の解明がまたれている。従来この問題は近代の賃労働史研究として取り組まれてきたが、日本的個性を考えるうえでは、その歴史的前提であり、歴史的貯水池ともいえる伝統社会、なかんずく近世における特質が明らかにされねばならない。そうした観点から、ヨーロッパ社会をモデルとしてそれとの距離を測るという方法ではなく、日本に固有なあり方を明らかにする必要がある。

そのさい、以下の3つの研究潮流が重要である。

第一に、90年代から取り組まれた身分的周縁論である。それが、領主―百姓間の関係以外の、都市を中心とするさまざまな諸集団・存在に光を充て分析の舞台に引き上げたことは周知のことである。そのなかで労働力の販売によって生きる人々、「日用」存在の諸稼ぎの様相も逐次明らかにされつつある。しかも等質的で代替可能な本質を有する労働力能であるがゆえに、異端的・対抗的性格を有することとされることとなった。近世の身分社会にあって、固有な位置を占めるものとして「日用」存在が注目される。ただその実態分析は緒に就いたばかりであり、事例の一層の発掘が求められるとともに、一般に史料制約が大きいなかでの分析方法の工夫も必要となる。

第二に、地域の絶対性・固有性に注目した地域史研究論である。上述の身分的周縁論は、それら身分集団・周縁存在の複合によって成り立つ都市社会、地域社会の固有性への着目という論点を引き出すことともなった。江戸を発展の到達点とし、地方城下町はそこへ向けての未熟な発展段階としてしか見ないような視点、あるいはある存在について、各地の事例を寄せ集めるような方法にかかわって、個々の地域社会そのものの分析に価値と意味が見出されることとなった。地域社会の有機的校正要素として労働社会を組み込む必要がある。

第三に、近代史からする労働力論である。さまざまな「同職集団」によって「日本近代」が構成されていたと見る東條由紀彦は、労働者を「同職集団」、「窮民」型労働力、「生計補充」型労働力と類型化する。ここで注目するのは、資本が依拠し、またそれへの制約となっている日本社会に固有な労働者の「人格的結合力」である。その観点から不熟練労働力の一部にも、『同職集団』としての性格をむしろ増幅されたような形で持つものが見出されることとなった。あるいは「資本による『労働力』の『商品』としての処理・再生産を究極的に制約する人格的存在」として「家」があったとする。「近代」の「同職集団」は近世の身分集団を前進とするというが、ここからすれば「日用」存在についても「人

格的結合力」のありようが問題となってくる。等質性＝代替可能性を本位とし、したがって個として展開するのが本来的な属性ではあれ、歴史具体的なレベルでは、独特な社会金木はそのものとして問題にされるべきであろう。

## 2. 研究の目的

近世の「日用」存在が、固有の共同組織を有さず、個として展開するとみなされてきたことに対して、歴史具体的なレベルにおける存在形態として、a血縁・地縁・職業上の縁などの「縁のネットワーク」に所属するもの、b一定の専門性・技能を修得することで仲間化するもの、cそれらの縁や共同性から疎外されるもの、という3つの類型でとらえることを申請者は提起している（森下 徹「地域と労働社会」『講座日本史6 近世社会論』東京大学出版会、2005年）。

このようなa～cの存在形態を、地域社会との有機的なつながりを意識して構成しなおすとき、次の二つの類型化が可能となる。

α 商業資本を核とするもの：「縁のネットワーク」に所属し、またその結節点としての宿などを拠点としつつも、周旋業者の経営に包摂され、それを通して雇用に従事する。

β 集団を核とするもの：専門性や技能を習得したものが「家」を形成し仲間化。ただし一般の小経営のように排他的な仲間形成はできず、周囲に不安定な「日用」存在を随伴する、アモルファスな集団。

このように設定しなおすことで、地域を構成する他の構成要素との連関がとらえやすくなる。こうしたα型・β型という類型化をふまえて、雇用関係によって生きる人々を地域社会のなかに位置づけることを目的とした。

## 3. 研究の方法

上述の目的を達するために、一つの都市だけではなく、性格の異なる都市を分析対象とした。すなわち i 巨大都市＝大坂、ii 中規模城下町＝萩、iii 小規模港湾都市＝周防徳山周辺部である。

そして用具所持や熟練・技能の度合いによって、a 単純な労働力として藩に雇用され、主として肉体労働に従事した下級奉公人、b 同じく藩に雇用されながらも一定の専門的な知識や経験を求められた手子、c 荷役の場をテリトリーとし所有対象とした仲仕、d 綿弓という用具を所持した綿打、などを取り上げた。

これらについて、①共同性の有無、②所属する社会組織、③商業資本との関係、などを指標にしながら、地域社会との関係を明らかにすることをめざした。

## 4. 研究成果

### (1) 大坂の仲仕と社会組織

巨大都市＝大坂には、主として西日本から、大動脈瀬戸内海を通過して年貢米をはじめとするたくさんの物資が入り込んだ。必然的にそれらの販売にかかわるさまざまな商人の成長をうながしたが、同時に荷役に従事するたくさんの「日用」層＝仲仕を都市社会のなかに定置させることになった。

かれら仲仕は単純労働の従事者ではあったが、作業遂行に必要な範囲での結合をなすことはもちろんあった。統括者を中心にしつつ、個別的で人格的な結合をなしていた。労働に基づく共同性は、単純労働者にもまちがいなく存在していた。

ところがそれとは別に、地位そのものを保障しあうための集団を発達させるようになる。その基盤には、年貢米のような大量の物資運送に携わることで利権が生じ、それと結びついた地位が物件化するという事態があった。労働と地位とが分離したでできた組織であって、仲仕＝労働者とは位相を異にするものだった。近世後期になると、こうした集団が広汎に形成されていたらしい。

ただし注意したいのは、それらの集団が、株仲間のような公認された地位を求めることは、ほとんどなかったことである。結局、依拠している荷役労働が単純労働であって、排他的な職分とはみなされなかったからだった。その意味において、身分社会の原理と本質的に相容れるものではなく、ために権力による公認は近代国家の成立まで待たねばならなかったと思われる。しかし逆にいえば、身分集団として認定された以外にも、巨大都市のなかには共同組織、社会組織が豊かに発達をとげていた。そういったことを示す事例ともみなしうる。

### (2) 萩城下と民衆世界

つぎに中規模城下町萩の例である。城下町は、もちろん家臣団の滞在先として建設されたものだった。

萩藩の家臣団は、江戸番手や国元での城番などの役によって編成されており、所属する組織もあげてそれに対応していた。諸集団すべてが将軍によって統制された軍隊の構成要素であり、国土それ自体が一つの兵営として成り立っていたとされる近世社会にあって、家臣団もまた大名のいる江戸屋敷や城の日常的な警衛を責務としていた。もちろん役所に詰め行政的な業務に就く者もあったし、その数は時期が下るにつれ増加していった。また窮乏化によって役負担からの離脱が見られたのも事実ではあった。しかし番手や番役が、幕末まで家臣団の基軸的な編成原理として機能していたことに変わりなかった。

そして役を勤めるさいには、一定数の供廻りを随伴しなければならなかった。「平時」

においても、壮麗な行列を組んで武士の結集する姿を見せつけ、民衆を靡かせることは支配を成り立たせる上で必要なことだった。勤番もそうした機能と一体だったからである。また家臣の役そのものの補完・代替も求められたから、藩として独自に奉公人を抱えていた。家臣や藩の奉公人は、役による家臣団編成によって必然化されたのだった。単に城下に集住したため労働力需要が発生したというに止まらないで、奉公人は支配体制の骨格維持に不可欠だったわけである。

そうした需要を担ったものとして、農村部から萩に流入していた1年契約の奉公人があった。17世紀末には城下外縁にかれらの流入拠点形成されている。その点では長期間藩に抱えられていた奉公人と供給のあり方が異なっていた。しかしともに単純労働力としての本質ではかわりがなく、所有や熟練から無縁でありつつも、個を基礎とし、身分制の原理からは異質で、ときに対抗的でありさえする行動や意識を共有する結合をなしていた。身分集団とは異なる、かれらなりの社会関係を形成していたわけである。そうした結合は、地縁や血縁をも媒介にしつつ不定形で多元的なつながりをなし、武家地、町人地と分節化された城下町を覆うように展開することになる。

やがて藩の奉公人のなかには、役所勤めを梃子に、地位を利権化し家として独占する者が表れてくる。いわば下級武士化する者の誕生である。しかもかれらは武家屋敷を買い取ったり、事実上の所有下に置くようになるし、中間の組織も自分たちの共同組織化していった。所有の主体へと成長し、自前の共同組織を有する、その意味では身分集団化の方向を取る者が表れたことになる。大坂の非人が家督（実質上の勸進権）・家屋敷を所有するに至るとの平行な動向を見て取ることもできよう。ただしかれらの役得は往々にして処罰の対象となるもので、城下町での屋敷所持も藩の規制により安定的ではなかった。それとして藩に公認されることもなく、身分社会で安定的な地位を手に入れるには限界があった。その意味で「日用」層としての対抗的・異端的性格を脱しきることは、ついにできなかった。

このように、武家奉公人は「日用」層としての本質を持ち続け、身分社会とは異質で拮抗するものではありながら、しかし役編成や支配機構を前提にそれに寄り添う形で成長を遂げていた。

### (3) 小規模都市の労働社会

小規模城下町として、周防徳山藩領の小規模都市群を分析した。

19世紀に入ると徳山藩領でも綿織物業が盛んとなっていた。なかでも藩領西部一西方

では綿屋や商人と並んで綿打の成長も見てとることができた。しかも、それまで綿屋に従属していたのが、とくに西方では自立を遂げ、数も大幅に増えていた。注目されるのは、かれらが身分社会の論理に即して、身分集団としての公認を得ようとしていたことである。ただしその実現のためには、綿打賃の一部を収奪しようとする、本来対立物であるはずの業者を頭取に頂き、その配下に入ることが必要だったのであり、綿打そのものとして身分集団化されることはなかった。そのことに、日用存在であるかれらが固有で排他的な職分としての認知を受けることはないという、身分社会での不安定な地位を見て取ることができる。

一般に個としてしか存在できないとされる「日用」層のなかにも、一定度の技能を獲得し、職分として主張できるものを身につけることを条件として仲間を形成し、身分社会に積極的に同定しようとするものがあつた。しかし「日用」層としての本質に一方では規定されて、結果的には地域社会において対抗的な意味合いをもつことになる、そうした事例を提示した。日用存在であっても、身分社会の論理が運動の武器になりえたことにもなる。

こうした経験を近世において積んでいたかれらであれば、近代になって身分制そのものは解体し、市場経済のなかに投げ込まれることになったとき、かえってこの身分社会の論理に依拠しようとするかと推測できる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 森下 徹「萩城下の都市民衆世界」伊藤毅編『シリーズ伝統都市 1 アイデア』東京大学出版会、2010 年、131～156 頁 (査読無し)
- ② 森下 徹「日本近世における労働社会の構造」『歴史評論』721、2010 年、56～70 頁 (査読無し)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 森下 徹「城下町萩の町人社会」近世大坂研究会、於大阪市立大学(大阪市)、2012 年、8 月 24 日
- ② 森下 徹「近世瀬戸内地域の新田開発と石工」国立歴史民俗博物館共同研究「人の移動とその動態に関する民俗学的研

究」於国際ファッションセンタービル(東京都)、2012 年 5 月 19 日

- ③ 森下 徹「近世大坂の運輸労働者」国際シンポジウム・東アジアにおける都市社会史への視座、於上海大学(中国・上海市)、2012 年 3 月 1 日

[図書] (計 1 件)

- ① 森下 徹『武士という身分—城下町萩の大家臣団』吉川弘文館、2012 年、全 214 頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森下 徹 (MORISHITA TOHRU)  
山口大学教育学部教授

研究者番号：90263748

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：